吉岡町学校ICT教育推進計画『HiBALIプラン2.0』（令和3年度）

吉岡町教育委員会

Hill-town Basis toward the Active Learning Innovation＝主体的・対話的で深い学びの改革に向けた丘の手タウン吉岡町の教育基本構想

『HiBALIプラン1.0』＝学校・家庭・文化センターの通信環境整備、小中学生端末整備（一人一台タブレットの貸与）、全教室65inchモニター設置、学習支援ソフトウェア導入等。
子どもたちがSociety5.0社会を生きることを念頭に、『HiBALIプラン』を環境整備1.0で終わらせることなく、ICTの積極的活用による未来志向の教育ビジョン2.0を打ち出し実践する。

育てたい資質・能力＝人と自然輝く 丘の手タウン 吉岡町で育つ子どもたちが、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き抜き、社会の形成に参画するための資質能力を確実に育てるとともに、資質・能力の三つの柱※をバランスよく育成する。

※資質・能力の三つの柱=「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」

そのために

群馬県教育イノベーション「群馬ならではの新しい学び」実現による「始動人」の育成につながる

吉岡町の全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、ICTを日常的に活用し学校教育の充実を図る

1 これまでの教育実践の蓄積×ICT=主体的・対話的で深い学び実現への授業改善（「はばプラⅡ」ICT活用Version）

吉岡中は「県ICT活用促進プロジェクト推進校」として実践

個別最適な学び

指導の個別化

教師は、子ども一人一人の考え・特性や学習の取組状況を即時、一斉に把握でき柔軟に指導に生かすことができる。

学習の個性化

子どもは、興味・関心に応じ自ら設定した目標に向け、多様な方法で調べ、学習を深めたり広げたりすることができる。

自分自身の学びを振り返ることで見通しを変更するなど、学びの調整をすることができる。

家庭等、授業以外での学習支援

学習支援ソフトを利用し個々の理解度に応じたドリル的学習が可能。

協働的な学び

自らの考えを広げる

子どもは、多様な考えに触れ、共有し関わり合いながら、自らの考えを修正したり深めたりして広げていくことができる。

個性の発揮と自己肯定感の高揚

子どもは、集団の中で一人一人が自らの考えを表現することで、個性や可能性を発揮し、自己肯定感を高めることができる。

遠隔地との交流による多様な学び

町内の学校はもちろん、他市町村や友好都市北海道大樹町の学校、外部機関、海外との交流を通じた学習ができる。

2 日常の業務改善

事務のデジタル化

- 家庭からの出欠席連絡
- 学校発の通信類
- 学校評価の集約
- 健康観察
- 各種アンケート
- 指導と評価の一体化に向けた活用
- PTA関係事務

資質向上　ICT支援員（明・駒＝週２日、中＝週１日）　教育DX推進スタッフ（明・中各１人、駒２人。各週５日）　中部要請訪問、町研「情報部会」、県センター、校内研修等

3 教員の意識改革

「教える」から「支える」へ

自分が求める考えだけを取り上げるのではなく様々な考え・気づきを受け止め繋いでいく役割へ。

4 明治小・駒寄小の「先進プログラミング教育実践モデル校」実践の目的＝「自己調整力」の育成

プログラミング学習

無謬論に基づく唯一解を効率的に覚えることを良しとして、目標準拠でその定着を測る評価観の呪縛から自らを解放しよう。プログラミングで試行錯誤しながら、失敗することに価値があることを感じ取っている子どもが求めているのは、活動の振り返りを共有することによって得られる友達や先生からの共感的理解（評価活動）である。ICTの機能を積極的に活用した、この相互啓発こそが学びへの動機付けをさらに高め、自己調整力を育む。まさにSociety5.0の社会に必須の資質・能力を育む学びがここにある。

（同事業のアドバイザー松田孝氏：「ICT教育がめざす地平とは」月刊日本教育　令和２年7月号p.7より抜粋）

5 オンラインの活用

不登校児童生徒の学習保障や学校とつながる手段　**学級閉鎖や臨時休業中のオンラインサポート**

参考：小(中）学校学習指導要領、令和３年度県学校教育の指針、中部教育事務所作成「主体的・対話的で深い学び」の視点を生かした子供主体の授業づくり、月刊「日本教育」No.498